

内 容	演 題	講 師
四国の取組紹介 【高知県】	海外放送コンテンツ「Wonder Box！四国」の 製作とその効果	株式会社高知放送 編成業務局長 竹下 誠一 氏
	<p>「Wonder Box！四国」と海外放送コンテンツの中身について、説明させていただく。まず、今回は高知放送からの説明内容となっているが、本事業は、徳島の四国放送、香川の西日本放送、愛媛の南海放送との共同企画事業である。</p> <p>はじめに、紹介ビデオをご覧いただきたい。（「Wonder Box！四国」の2分20秒バージョンを視聴）</p> <p>台湾で人気のある温泉、新鮮な野菜・果物、ポップカルチャーを含めたサブカルチャーをテーマに、1話30分の番組を3話製作し、台湾で高い視聴率を誇る地上波の総合チャンネルである民視電視台で放送を行った。</p> <p>事業の取組にあたり、昨年9月下旬の総務省による事業企画の公募開始の前に、相手先である台湾の放送局とコンタクトをとり、採択になった場合は放送していただくことを確約していた。事前に仕掛けができていたので、取組が早かったと思う。</p> <p>台湾の国際ビジネス担当者と打合せを重ね、ローカライズは日本でやるべきことであったが、台湾側で中国語にローカライズすることになった。ローライズ作業は、番組を納品してから放送までの1ヶ月間であったが、順調に行えた。</p> <p>台湾での放送にあたり、いろいろ制約があった。放送内容に値段を入れてはいけないことや、個別の値段が映っているものは放送できないことなどであるが、事前に確認していたので内容的に問題はなかった。</p> <p>課題としては、フェイスブックなどの番組と連動したSNSによる情報発信について、担当者を配置できなかったこともあり、登録者数などが今ひとつであったことである。</p> <p>事業の効果測定として、台湾は世帯ではなく個人視聴率であり、2～3%で人気番組となるため、0.2%を目標としていた。結果、第1話が0.19%、第2話が0.21%、第3話が0.29%と平均して目標を超え、視聴率0.29%であった第3話は、週間7位に入った。</p> <p>また、番組の最後にクイズを行い、四国ツアープレゼントの告知をしたところ、4,865件の申し込みがあった。台湾ではこのような企画での応募数は800件程度と聞いていたので、はるかに上回る申し込みをいただいたことになる。台湾の方々の四国への関心の高さが伺えた。</p> <p>台湾からの観光客誘致にあたり、観光団体や施設と連携して番組の製作段階から番組情報などを発信した。</p> <p>四国への台湾からの延べ宿泊数について、正式な数字は発表されていないが、観光団体等からの聞き取り調査を元に算出した数字では、番組の放送時期には44%増えていた。4～5月のデータでは40%増だったので、多少は効果があったのではないかと考えている。</p> <p>その他、四国ツーリズム創造機構と連携して、タイやソウルで行った国際旅行博覧会等の会場でも番組コンテンツを活用して四国を紹介し、観光誘客に努めた。</p> <p>事業の効果としては、台湾での視聴率がよかったので、台湾の放送局からは、今後も四国の放送局と付き合いいきたい、というお話をいただいた。また、他のアジア局とのマッチングについても検討を進めている。</p> <p>今年度も総務省における事業企画の公募開始を近日中に控えている。前年度、4つの放送局での共同製作はアピールになったと思うので、今後も可能であればこうした取組をしていきたい。そして、今年度も採択になれば願っている。</p> <p>余談であるが、講演会の前に本ホテルの隣にある神社に行き、コンテンツがうまくいきますように、とお祈りしてきた。そしておみくじを引いたところ大吉で、願い事は叶う、となっていた。そうなれば嬉しいと思っている。</p>	<p>＜質疑・応答＞</p> <p>坂本先生：海外での放送にあたり制約がある、という説明があったが、その辺りは事前に調査して現地でのデータ処理等をお願いしたのか。海外展開していく上では、根本的に必要なことであるのか。</p> <p>竹下氏：今回のケースでは、他のエリアのビデオでダメであると指摘されたところを事前に教えてもらっていたため、編集等は必要なかった。台湾の放送局からは、彼らの思惑で編集するため、ロール分けをしないで欲しい、という要望があった。その他の国でもイスラムのハラールなど、事前に調査してから製作した方が順調に作業が進んでいくのではないかとと思う。</p> <p>原先生（香川大学大学院）：海外展開について、日本の進み具合を教えてください。</p> <p>竹下氏：コンテンツの海外展開に向け、官公庁の補助金や国際交流基金の補助金があり、海外展開の傾向は強くなっていると思う。四国のある観光団体の方が、「東南アジアの人は、欧米の人が行ったところを追って行く」と言われていたので、二次作用を期待して欧米にも展開していきたいと考えている。外務省も途上国での発信を始めており、海外展開の取組はこれからどんどん広がっていくものと思われる。</p>